

唐話纂要の仮名音注について

中村雅之

1. 唐話纂要とは

岡島冠山(1674-1728)の『唐話纂要』は本邦初の中国語会話入門書として知られる。現代人の我々にとっては 300 年前の日本語および中国語の資料でもある。この書では中国語の表現に対して 3 種の注が記される。例えば、

休要打郷談

という表現に対して、①返り点と送り仮名を振って、「郷談ヲ打スルコトヲ要スルコトヲ休メヨ」と読むことを可能にしており、②右に「ヒウ ヤウ タア ヒアン ダン」と中国語の発音を記し、③下に「イナカ。コトバラ。云フベカラズ」と全体の和訳を付す。続く文にも同様に、

須要講官話

に対して、①「官話ヲ講ズルコトヲ要スベシ」、②「スエ ヤウ キヤン クハン ワア」、③「ミヤコ。コトバラ。云フベシ」とある。多重的な注釈は 12 世紀の西夏語語彙集『番漢合時掌中珠』や 14 世紀の蒙古語語彙集『華夷訳語』を彷彿とさせる。

②の仮名で示された発音は濁音声母と入声を有しており、杭州音であるというのが通説である。実際には岡島冠山が長崎で耳にした杭州音などの南方音を体系的に整理したものということになる。これ以降に岡島によって作られる唐話書(『唐話便用』など)では全て南京音を用いることになる。おそらく若い頃に覚えて慣れていたのが杭州音、より広く通じるのが南京音ということなのであろう。

なお、『唐話纂要』では入声の表示は「喫(キ)」「只(チ)」のように無標であり、非入声は「気(キイ)」「你(ニイ)」のように母音を重ねることになっている。『唐話便用』など後のものは「キツ」「チツ」のように入声に「ツ」を付す。

2. 「ハウ」と「ホウ」

「要(ヤウ)」「好(ハウ)」「少(シヤウ)」など、[-au]の表記には「アウ」のように区切りの小さな「^o」を用いる。これは日本語の「ヤウ」「ハウ」「シヤウ」がそれぞれ長母音として[jo:] [ho:] [jo:]と読むことになるため、区切りを入れて二重母音であることを示したものである。同様に、「候(ヘウ)」「頭(ドウ)」も[hjo:] [dʒo:]ではなく[həu] [dəu]と読ませるための表記。「休(ヒウ)」「久(キウ)」などはほぼ文字通りの発音で問題ない。

一方、「個(コウ)」「何(ホウ)」「過(コウ)」などの果摂一等の表記では、意図している中国語音は[ko] [ho] [ko]である。つまり日本語としては「コウ」「ホウ」「コウ」をそれぞれ[ko:] [ho:] [ko:]のつもりで用いており、二重母音を意図してはいない。仮名表記が「コ」「ホ」「コ」でないのは非入声であることを明示するためである。開口の「個」も合口の「過」も同音であるのは南方雅音と南京官話に共通する特徴である。

3. [ʃ]と[s]、

『唐話纂要』においては[ki-]と[tsi-]の区別あるいは[hi-]と[si-]の区別など、いわゆる尖団の区別が明瞭であり、団音は「記(キイ)」「気(キイ)」「喜(ヒイ)」など、尖音は「借(ツエ、)」「請(ツイン)」「心(スイン)」などのように記される。[ʃ]と[s]（および[tʃ]と[ts]）の区別には細心の注意を払っており、尖音に「シ」や「チ」が用いられることはない。「シ」が用いられるのは「少(シアウ)」「爽(シアン)」など北方でそり舌音が対応するものであり、「朝(チアウ)」や「昌(チアン)」の「チ」も同様である。

これに関連して、尖音に「セ」が用いられないことにも留意すべきであろう。「見(ケン)」や「連(レン)」の例に倣えば、「先」は「セン」となりそうであるが、実際には「スエン」と記される。このことは岡島冠山の言語では「セ」が[se]ではなく[ʃe]であったことを物語る。「説(セ)」の例も参考になろう。当時の関東で「セ」が[se]であったことは、有名なロドリゲスの『日本大文典』(17世紀初、長崎)の証言によって知られる。

4. ハ行の音価

日本語のハ行の音価については、江戸時代の前期に語頭で[ɸ] > [h]の変化が起こったとされる。『唐話纂要』はまさにその過渡期にあたっており、音注においても中国語の[f]と[h]の双方に用いられている。「官(クハン)」のように、語中において「ハ」が[wa]であるのは予想通りである。

「好(ハウ)」「休(ヒウ)」「興(ヒン)」「何(ホウ)」は中国語の[h]および[h̥]に対応させたもの。一方、「福(ホ/フヲ)」「方(ハン)」「紛(フン)」は中国語の[f]に対応している。岡島冠山の言語でハ行が[ɸ]と[h]のいずれであったかは分からない。「花」が「ハア、」であるのを見ると少なくとも「ハ」に関しては[ɸa]であった可能性が高いが決定的ではない。